



本間文庫
文庫 14
A 142





抗議餘言 3

奥野 寛 4

富

27

回請調査會の可決した新假名遣に對する予
 等の抗議は、二月六日衆議院の分科會に行け
 る杉山代議士の質問に對し文相岡田氏の言明
 せられた所と由つて目的を達した。即ち右は
 文部省に於て小學を初め一切の教科書に實施
 する意志の無いことが明白になつたのである。
 予等は文部省の悔意を喜び、之に由つ
 て回請教育が一時でも攪亂されず済んだこ

新假名遣

とを思ひて安心した。

編輯委員會の委員達の中で右の**新名遣**を熱心
に主張した人々には新聞記者の諸君が多かつた
ので、其等の諸君は自ら關係をなして新聞紙
上で是非邪しく實行して見ると云ふ態度を相下
ある。予等は諸君が**世**自説に忠實であるこ
とに教意を表する外に言ふべきことも無い。諸君は専ら
便宜のみに注目される。それが果して諸君の考へら
れるやうに便宜ありかであるかどうか。文化の廣汎
な領域に亘つて記述し、教育ある人々をも讀者とす
る新聞紙の使命より考へて、却てそれが不便至極な結

果にさうはしあいかと思ふのは、新聞記者さうな
予等の杞憂であるかも知れない。それは諸君の實
際試験に由つて早晚明瞭にあるであらう。猶今
日までの経過を由ると、右の**新**假名遣が使用されて
ゐるのは東京に於ける一二の新聞に止まり、そ
れも標題にだけ用ひられるに過ぎない。本文には
在来の假名遣が齟齬されてゐると云ふ風であ
る。尤もそれはルビ附の活字の容易に改鑄し難
い事情からであらうが、さう云ふ風では紙面の

不統一が著しく目について、讀者には學問的とは
免し、趣味として決してよい感しを興へないから、
新假名遣の實行には懐き遣り方であらうと思は
れる。

西紙

朝。新聞は東西とも昔から最も假名遣の最
正な新聞として予は尊敬してゐる。地方では朝日
新聞を見て假名遣の手本にせよと教へてゐる
教育者を見たことさへある。その朝日までが一
部に新假名遣を用ひ始めたるは非常な変化で
あると感ぜられるが、保一論議にして雑誌にし
ても大部分は假名遣が最近に守られてゐる。この

在来の古典

假名遣の

程度のことすら決して新假名遣が新聞記者の諸君
に由つて遠かに普及しよと思はれぬ。予等から
見ると向違つた文章が載つてゐると評客して
看返すればよいのである。假名遣は専門家で
ない限り誰でも多少は向違ふ。唯だ新聞記者の
或人々だけが意識して向違へようとするのは、
奇癖の一種として予等は許容する。

予等が兎も角も古典假名遣をオトリテとし
て守らうとするのは、それに學問的基礎があるからで
ある。また其方が便宜だからでもある。若し之を代つ

て學問的基礎を十分精確に持つ新綴字法が學者の努力を集めて大成されるならば、更に喜んで其れに就くであらう。

便宜主義に終始する國語調査會の新綴字法に於て、
は全然學問的基礎が缺けてゐる。この事は「明星」
二月號に於て予等が既に述べたから、學問上の
反駁が國語調査會の委員達より起るまい限り、
また細論を繰返す必要を見ない。予等は文部
省が新綴字法を教科書に用いまいと云ふ言明

を得たことによつて満足する。

標この場合一言するが、曩も文部省の決定
は漢字制限もまた便宜主義に本づく愚考たる
ことは此度の新綴字法と同一である。人向の思
想も人爲的に——殊に官憲の力で抑壓しかた
如く、思想的確たる記號たる文字も抑壓する
ことは不可能である。二千年來支那の印度の古典に
養はれた所の我國の精神文化を抛ち得まい限り、ま
た決しい抛つべき傳統的でない限り、漢字は日本

近代の

人の思想感情の記録として自然に必要である。それは
新思想を表現するに歐洲語が國語化し、同時に歐洲の
文字が國字化すると同様の必要である。漢字若くは
國字を制限するよりば、多量國民は強とあらわ
るを得ないであらう。
(強の必要に應じて居る)

精神文化に属する問題、殊に學問藝術に属する
問題は、断りて便宜主義のみには従はれたい。『讀賣』
の記者は、新假名遣を支持する立場から、國文國
語の學者がなぜ未來に就て考へないかと警告された
が、予等は未來のたのみに古典を尊重するのであ

こそ

正しい

る。言い換れば、未來の國民を學問的秩序の中に在ら
しめたいと思へばこそ、學問的基礎の全く缺如し
た新假名遣に反對し、より正しい學問的基礎を備
へた新綴字法の大成せしむる目まで在來の假名
遣に準據しようとするのである。予等は便宜主
義以外に根據のない人達と之に就て論議する、もの
徒勞を窺つてゐる。唯だ怪訝に堪へないのは、京
西高等大の國文國語の學者達が今日まで之に就て
學者の立場より論議せざる所の無いとである。殊

に最も古典的なる神宮皇學館の館長上田篤年
博士と國學院大學の學長芳賀博士とか、國語館
主幹委員として新假名遣に賛成された學問上の理
由の發表されたいを遺憾とする。

こと



